

平成 21年 5月 31日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18530386  
 研究課題名（和文） 在日済州島出身者の生活史調査-解放直後の生活過程と意識  
 研究課題名（英文） Oral History research of Jeju people in Japan-The life process and consciousness just after the liberation  
 研究代表者  
 伊地知 紀子（IJICHI NORIKO）  
 愛媛大学・法文学部・准教授  
 研究者番号：40332829

研究成果の概要：本研究では、口述オーラル・ヒストリーという調査方法を用いることによって、在阪朝鮮人の多数を占める済州島出身の方から、この時期の生活状況を伺うインタビュー調査を実施し、これを記録することによって、民衆の視点から見た、等身大の東アジア現代史の実像を跡づけるものである。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	600,000	4,100,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：済州島、在日、解放直後、オーラル・ヒストリー、生活史、4・3事件、東アジア、移動

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 大阪は、日本全国でも韓国・朝鮮人が集中している地域であり、しかもその多くを済州島出身者が占めている。それは日本の朝鮮植民地支配期間中の1920年代前半より、大阪・済州島間に定期航路が開設され、多数の済州島人が生活の糧を求めて来阪、定着したという事情によるところが大きい。そのため済州島出身者を中心とする植民地期の在阪朝鮮人の生活史は、従来からさまざまな観点から検討されてきた。

しかしこれとは対照的に、植民地支配から解放された直後の在阪朝鮮人の歴史については、さほど研究の蓄積があるとは言えない。

なかでも当時の生活状況については、従来は断片的な記録や証言から推測できる程度であり、その実態はほとんど明らかにされていない。

(2) ここでとくに留意しておかなければならないのは、多くの済州島出身者が、解放前後の時期にいったん済州島に帰りながら、その後の政治的混乱を避け、日本に再渡航したケースがしばしば見られることである。解放後の左右のイデオロギー対立と冷戦の激化を背景に、朝鮮半島の南北分断の危機が迫るなか、済州島では1947年の3・1事件を契機として右翼勢力による住民迫害事件が多発し、翌48年にはこうした状況に抗して

島民の蜂起（4・3事件）が発生、権力者による苛酷な弾圧が繰り返された。この4・3事件は、民衆虐殺の実態を糊塗しようとする韓国の歴代反共政権により、長く「共産主義者の暴動」と決めつけられてきたが、近年ようやく事件の詳細が明らかにされつつあり、従来タブーとされてきた体験者の証言も、さまざまメディアを通じて伝えられるようになった。

（3）こうした郷里の悲劇が、在日の済州島出身者の人生に大きな影を落としていることは言うまでもないが、それは日本での生活体験とともに、まさしく東アジア現代史の矛盾の縮図とも言うべき事象である。このような意味で、在日の済州島出身者の歴史的体験は、後世に受け継がれるべき記憶として、ぜひとも記録にとどめておく必要があると考えたのである。解放前後に再渡日した済州島出身者が少なくないなか、解放後の場合は「密航」となることが指摘される。在日朝鮮人史を形成する人々のなかには、この解放後渡航世代は少なくない。しかし、「密航」そのものの経緯がいかなるものであれ日本国内において「不法滞在者」扱いされ存在そのものが不安定となるため、当事者が語ることすら困難であるゆえに研究史のなかで簡単に言及はされてもその様相は丁寧に論じられてはいない。解放後渡日した済州島出身者のなかには、4・3事件との関わりで「密航」してきた人々が少なくないとみられる。日本による植民地支配によって形成された大阪との繋がりの中で、難民的に渡日してきた人々を単なる「不法滞在者」を問うことの問題性を指摘すること自体は即座にできる。しかし、「4・3事件」がタブー視されてきた経緯ゆえに、人びとは個々の体験・経験をすんなりと口にできなかった。

（4）また、朝鮮半島におけるイデオロギー対立が在日する人びとの日常にも微罪に入り込んできた。4・3事件を「民衆蜂起」と表現するのか「共産主義暴動」と表現するのかで1つの事象の現れ方は異なり、いずれかの表現を採用した語り手の立ち位置が問われる場面がないとはいえない。さらに、4・3事件が韓国においてタブーとされてきた歴史は、在日する人々には周知のことであったが、民主化以降の動きは詳細に伝わるわけではないこうした抑圧と暴力の構造のなかで、「書きうる部分」「語りえる部分」から在日の歴史の記述は綴られてきたといえよう。

## 2. 研究の目的

（1）朝鮮の解放後、在日する人々の歴史・法的地位・差別・アイデンティティなどについて数々の研究が蓄積されてきた。当初は歴史や法的地位といった側面に重心が置かれていたが、次第に差別、そして文化・アイ

デンティティと関心の幅が広がっていった。こうした流れのなかで、在日朝鮮人といっても一枚岩なのではなく、出身地や渡日・在日の経緯・経験などの多様性にも言及されるようになった。

在日済州島出身者の生から見えてくる地域とは、地図上で区切られる境界線とは異なる領域としてもある。在日済州島出身者の生活史は、済州島史であり在日朝鮮人史であり、大阪史でもある。また、先に述べたようにそれらを取り巻く国家や世界の動きと連動してきた。つまり、大阪の在日済州島出身者の生をおして、「地域」という枠組みが行政区域や国境では捉えきれない動きとともにあるということが示されるのである。こうした視点にたつて日本と朝鮮半島の歴史を再考する研究としては、『20世紀の滞日済州島人—その生活過程と意識』高鮮徹、1998年、『越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究』杉原達、1998年、および『済州島現代史—公共圏の死滅と再生』文京洙、2005年のみである。しかし、いずれも解放直後の生活史、また「密航」と規定される渡日者の生活史については分析が薄く、こうした領域については他に研究がほぼ存在しない状況である。韓国では、『4・3は語る』済民日報4・3取材班、1994—1999年に代表される証言集が多数出版されるようになっていたが、済州島の人びとが解放後在日するに至った経緯や本国との繋がりといった部分は今後の課題となっている。

（2）本研究は、解放直後の在日済州島出身者の生活過程や意識を生活史調査という個々人の人生の微細な領域を対面関係のなかからゆっくり明らかにし分析する手法を用いることによって、国境で区切りえない日本と朝鮮半島の関係性を提示し、民衆の視点から見た等身大の東アジア現代史の実像を跡づけていくという従来の研究にとって着手されてこなかった領域に取り組むものである。日本と東アジア諸地域との関係性の構築は喫緊の課題であり、本研究は今後日本社会が歩んでいく方向性を模索するうえでも、他に代えがたい成果を生み出すものである。

## 3. 研究の方法

### （1）学際的研究方法の検討

本研究は社会学者と歴史学者の共同研究であるため、対象を同じくしてもその分析方法や視点などについては、相違がある。そこで、改めて個人研究の知見を持ちより、他の研究者・院生を加えて勉強会を開きつつ、学際研究としての本研究の意義を深めた。また、日本国内の研究のみならず、先行している韓国の調査成果を収集し、韓国の研究者との意見交換を行う。済州島には、「4・3研究所」があり継続して証言集発行のために資料収集

を行っており、今後はその資料をもとにした各学問分野における研究への発展とそれによる国際研究への進展を目指す。

#### (2) 個別領域における研究の発展

代表者(伊地知)と分担者(藤永)は、それぞれ日本の植民地支配と濟州島の経験を民衆の視点から捉え直すことを試みてきた。本研究を通して、それぞれの個別テーマの発展に反映するべく文献研究と実証研究の総合を目指す。

#### (3) 生活史調査

代表者(伊地知)と分担者(藤永)のそれぞれの専門が異なるため、生活史調査を実施するにあたってこれまでの成果を検討し、従来の生活史調査の文献リサーチとともに、個別テーマに応じた方法論を考察する。

また、調査対象者である濟州島出身者の確保が困難なテーマであるため、大阪市生野区・東成区およびその周辺地域に出向き、調査対象者が多く通う夜間中学、識字学級、コリアタウン商店街との関わりを形成しながら調査対象者の情報を収集する。

調査対象者が確保され次第、順次インタビューを行う。実施場所を借り、ICレコーダーを用い、本研究に関心のある大学院生や研究者に依頼してインタビュー内容の起こしを行う。

インタビュー内容を起こしたものは、代表者と分担者が中心となり協力者とも打ち合わせをしたうえで編集し、調査対象者に確認していただき、公刊の是非を伺ったのち、許可が出た場合公刊する。さらに、研究成果は、代表者と分担者がそれぞれ所属する研究会や学会にて公表する。また、韓国の研究機関に提供できるよう発表・公刊する。

#### 4. 研究成果

(1) 日本では渡日時期が異なる12名の方、韓国では2名の方に生活史調査を実施した。本研究は、社会学(伊地知)・歴史学(藤永)・文化人類学(高村・高)・経済学(鄭)による学際的共同研究であるため、各分野の知見を突き合わせながら調査研究を実施してきた。

(2) 日本でのインタビュー内容については、調査対象者の了承を得たうえで『大阪産業大学論集人文科学編』および『大阪産業大学論集人文・社会科学編』へ掲載した。インタビュー内容の起こしは、本研究に関心を持つ大学院生・研究者に協力を依頼した。本研究は、プライバシーの問題に関わるものであるため、必ず調査対象者に調査後の内容を確認し、公表についての許可を得たのち公表・公刊している。学会発表および図書についても、前者2件、後者1件の成果を報告および公刊し、いずれにおいても一定の評価を得ている。

(3) 夏季休業を利用し研究代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者全員で訪韓し、先行している韓国の調査成果を収集し韓国の

研究者との意見交換を行った。訪韓の際、これまでのインタビューをさせていただいた方々の本籍地や語りのなかで登場した地名を訪ね、語りのなかで出て来る地域の様子や当時の家の場所などを確認した。さらに、現地の方々にも解放直後の濟州島の様子について説明を受けた。その他、先行している韓国の調査成果を収集し韓国の研究者との意見交換を行った。

(4) 上記の研究成果公表および公刊、さらに韓国でのフィールドワークにより、本研究が従来の日韓関係史、在日史において貴重であることが評価され、濟州島にある「4・3研究所」との連携も強化された。また、公刊物を見た人からインタビューを希望するケースも出てきている一方で、本研究でのインタビュー後間もなく亡くなられた方もおられるため、こうした調査の緊急性を実感した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① 伊地知紀子, 藤永壮, 高正子, 鄭雅英, 高村竜平, 村上尚子, 皇甫佳英, 福本拓, 塚原理夢「解放直後・在日濟州島出身者の生活史調査(6)-金好珍さんへのインタビュー記録『大阪産業大学論集人文・社会科学編』Vol. 4, pp. 131-155, 10月, 2008年。
- ② 伊地知紀子, 藤永壮, 高正子, 鄭雅英, 高村竜平, 村上尚子, 皇甫佳英, 福本拓, 塚原理夢「解放直後・在日濟州島出身者の生活史調査(5・下)-高蘭姫さんへのインタビュー記録『大阪産業大学論集人文・社会科学編』Vol. 3, pp. 125-147, 6月, 2008年。
- ③ 伊地知紀子「濟州4・3を巡る巡礼-無辜な死を悼む旅路-」愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム実行委員会『四国遍路を中心とした日本・世界の巡礼の総合的研究 平成19年度報告書』, pp. 44-51, 3月, 2008年。
- ④ 伊地知紀子, 藤永壮, 高正子, 鄭雅英, 高村竜平, 村上尚子, 皇甫佳英, 福本拓, 塚原理夢「解放直後・在日濟州島出身者の生活史調査(5・上)-高蘭姫さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集人文・社会科学編』Vol. 2, pp. 105-126, 2月, 2008年。
- ⑤ 伊地知紀子「定住と非定住の位相-濟州島からの移動/濟州島への移動とともに」『市大社会学』No. 8, pp. 1-16, 3月, 2007年。
- ⑥ 伊地知紀子, 藤永壮, 高正子, 鄭雅英, 高村竜平, 村上尚子, 皇甫佳英, 福本拓, 塚

原理夢, 李陽子「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(4・下)-李健三さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』Vol. 1, pp. 31-56, 10月, 2007年。

⑦伊地知紀子, 藤永壯, 高正子, 鄭雅英, 高村竜平, 村上尚子, 皇甫佳英, 福本拓, 塚原理夢, 李陽子「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(4・上)-李健三さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集 人文科学編』Vol. 122, pp. 99-124, 6月, 2007年。

⑧伊地知紀子「定住と非定住の位相—済州島からの移動/済州島への移動とともに」『市大社会学』No. 8, pp. 1-16, 3月, 2007年。

⑨高村竜平「植民地朝鮮における土葬・火葬・風水」『アジア民衆史研究』第12号, pp. 34-49, 2007年。

⑩伊地知紀子「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査」『日本オーラル・ヒストリー研究』Vol. 2, pp. 40-51, 9月, 2006年。

[学会発表] (計2件)

①伊地知紀子「在日済州島出身者の生活世界と済州4・3事件—生活史の断片から—」『立命館大学コリア研究センター国際シンポジウム「浮遊する在日コリアン—同化と差別のなかで」第1セッション 米占領下の在日コリアンと民族運動』(於:立命館大学), 11月14日, 2008年

②伊地知紀子「済州4・3を巡る巡礼—無辜な死を悼む旅路—」四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム・研究集会「巡礼と救済—四国遍路と世界の巡礼—」(於:愛媛大学), 12月, 2007年。

[図書] (計1件)

①伊地知紀子・村上尚子「解放直後・済州島の人びとの移動と生活史—在日済州島出身者の語りから」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版, 京都, pp. 115-145, 2008年。

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

なし。

○取得状況 (計 件)

なし。

[その他]

なし。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊地知 紀子 (IJICHI NORIKO)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号: 40332829

### (2) 研究分担者

藤永 壯 (FUJINAGA TAKESHI)

大阪産業大学・人間環境学部・教授

研究者番号: 00247876

### (3) 連携研究者

鄭 雅英 (CHONG AHYONG)

立命館大学・経営学部・准教授

研究者番号: 90434703

高 正子 (KO JEONGJA)

天理大学・国際文化学部・講師

研究者番号: 80441418

高村 竜平 (TAKAMURA RYOHEI)

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号: 30425128

### (4) 研究協力者

村上 尚子 (MURAKAMI NAOKO)

津田塾大学・国際関係学研究科博士課程